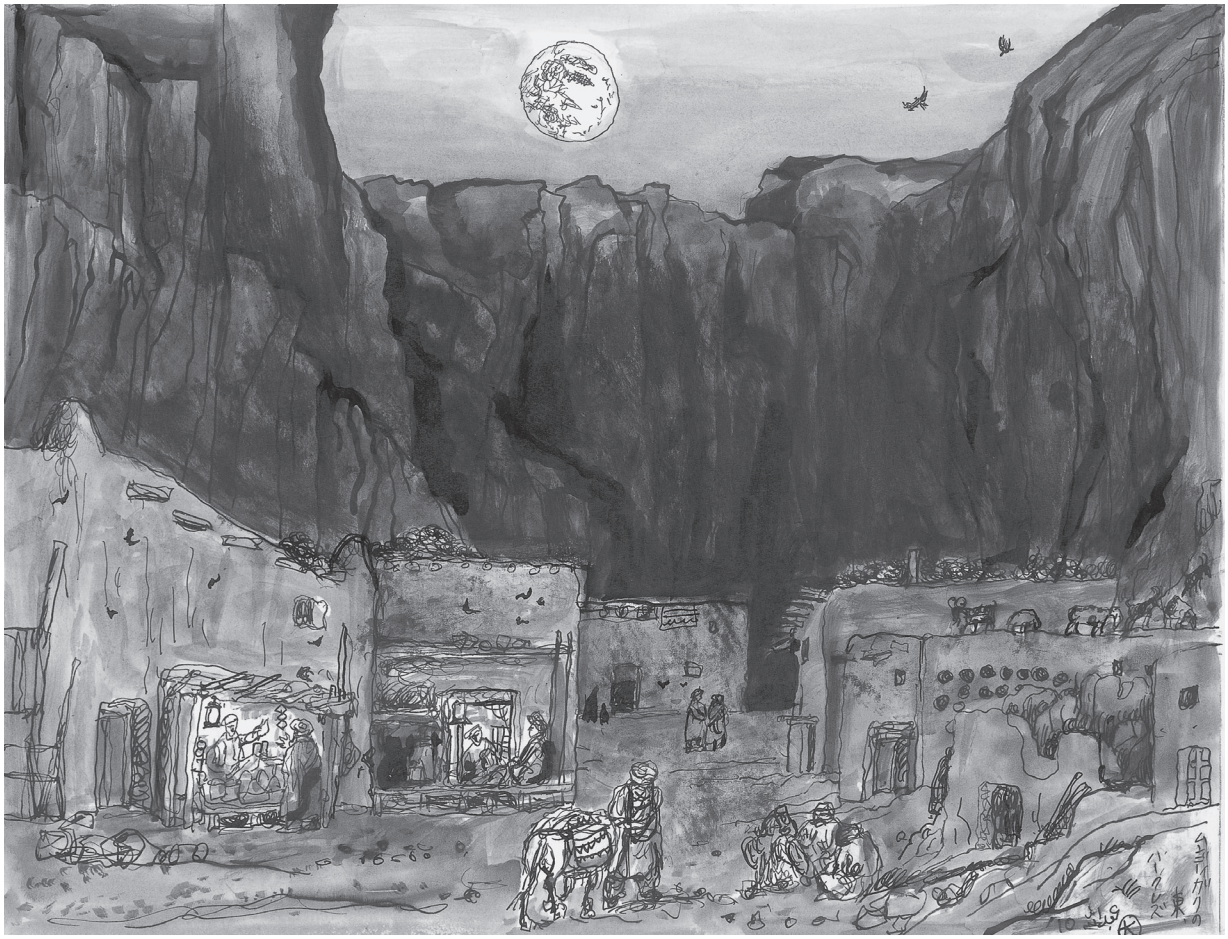
Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL　092（731）2372
FAX　092（731）2373

No.106
2010年12月8日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵　ムンディガクの東、ハーク・レズ（画・甲斐大策）

「最大規模」の復旧事業と自然の恵み	中村　哲
ああ、我が恥多き所行	杉山大二朗
三つ目の取水口工事、四度目の「冬の陣」	鈴木　学
ショベルで造った“平和の路”	石橋忠明
ペシャワール会現地報告写真展に寄せられた感想から	
事務局や現地が身近なものに～現地報告写真展レポート	沖牟田龍雄
ペシャワール会・現地報告写真展のお知らせ	ペシャワール会事務局

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

「最大規模」の復旧事業と自然の恵み

――大洪水の後始末はこの春までが勝負です

ペシャワール会現地代表　中村 哲

大洪水の爪痕――急務の取水口復旧

みなさん、お元気でしょうか。

アフガニスタンは間もなく冬に入ります。河の水が急に下がり始め、例年のことながら、あちこちの取水堰の補修が必要な季節です。今年はまた特別です。

去る七、八月にアフガニスタンとパキスタンを襲った「世紀の大洪水」は、あちこちに爪痕を残しました。災害直後は大きなニュースとして伝えられましたが、本当の後始末はこれからなのです。

私たちはアフガン東部・クナール河沿いで用水路工事を進めてきましたが、冬になって河川敷が見え始め、改めて洪水の凄まじさに驚いています。PMS（Peace〈Japan〉Medical Services）が手掛けた全ての取水堰が影響を受けました。

開通して多くの農民たちに恩恵を与えてきたマルワリード用水路の取水口も、対岸中洲が流されてしまい、充分な取水が困難になっています。最低水位になる厳冬期を待って一挙に改修せねば、灌漑域三千ヘクタールの小麦が壊滅してしまいます。

この他にも、シェイワ、ベスード、カマの各取水口も一時は水が途切れました。九月から復旧工事を始めたものの、青息吐息です。特に東部ニングラハル州で最大の穀倉地帯、カマ郡の二つの取水口は、仮工事に近い状態でしたが、対岸の村落と同様、水路そのものが水没するほど激しいものでした。

地元の悲願、カマ取水口を新設・増強

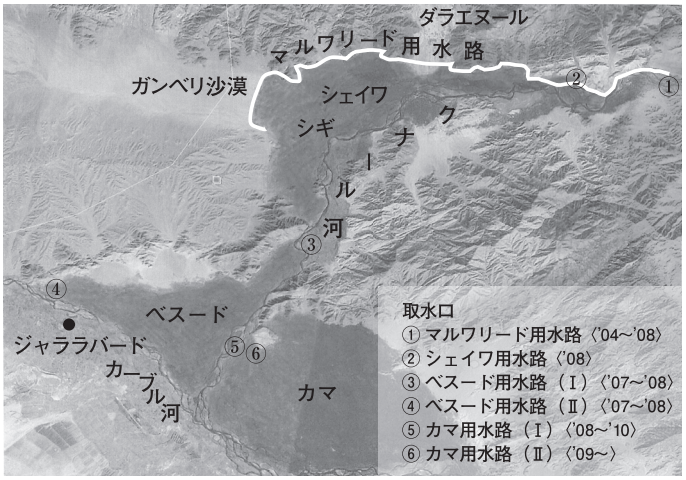
カマの広大な耕地、七千ヘクタールを潤す取水堰は二つあり、うち第二取水堰が全体の七〇パーセントを受け持っています。PMSが二〇〇八年十二月に仮工事を始めると、続々と帰農する者が増え、カマは往時の繁栄を取り戻したかのように見えました。PMSも、数年がかりで完成する積りでいました。それが洪水の影響を相当受けて新設を余儀なくされ、取水堰改修、水門と主幹水路一キロメートルの新設、対岸の護岸（約四キロメートル）の建設に追われています。この辺りは、ちょうど北部ヒンズークッシュ山脈から来るクナール河が本流のカーブル河に合流する場所に当たります。といっても、九州の三・四倍の流域面積ですから、暴れだすと手がつけられません。昔から氾濫原として有名で、歴

新しく建設中のカマの第２取水口（右上は洪水直後の様子）

代のアフガン政府が手を焼いてきた場所だそうです。

「カマ取水口建設は不可能」というジンクスがあり、その完成は長い間住民たちの悲願となっていました。今回地方行政とも協力し、本格的な新設に乗り出したのです。

さらに対岸ベスード側の護岸工事をも同時に進めないと、住民が不安がります。こちらの方も相当な洪水被害を受け、多くの村々が水没しました。クナール河の主流がベスード側に年々移動していて、今夏の大洪水で岸辺が、幅数十メートル、長さ四キロメートルにわたって破壊されました。



このままでは、来夏に数百ヘクタールの農地と家々が押し流されてしまいます。ＰＭＳとしては、異例の決断で直ちに工事を始めました。

過去最大規模の精力を投入

かくて、洪水被害の影響は、私たちを三正面、四正面の仕事に直面させることになりました。ワーカーＯＢの方々も駆けつけてくれ、ＰＭＳを支えるペシャワール会も、必死の国内活動を続けています。

カマ側の護岸工事が外国の支援で行われていましたが、それが元来遊水地であったところを囲い、対岸ベスード側に洪水を押しやったと思われます。このことを住民たちはよく知っていて、直ちに対岸同士の話し合いとなりました。世界中「対岸」は不仲です。両者を円く治めるためには、やはり行政がしっかりしていなくてはなりません（そのことも勘定に入れてやりかけの護岸工事をＰＭＳが引き受けるつもりでしたが、さすがに大洪水は予測できませんでした）。

しかし、「二月下旬まで」という自然が決める時間制限には逆らいようがなく、見切り発車となりました。おそらく今冬が、ＰＭＳとしては過去最大規模の仕事となるでしょう。

毎年、「最大規模」が繰り返されますが、要するに仕事が年々大きくなるということです。最近気づいたのは、話ばかりが多くて、誰も本格的に実行する者がいなかったということです。

〝死の谷〟ガンベリは着々と緑化

でも、暗いことばかりではありません。「ガンベリ沙漠開拓」は着々と進んでおり、今年は三〇ヘクタールに小麦畑が出現しました。周辺農家を入れると、一〇〇ヘクタールを超えていると思います。沙漠の面影は少しずつ

マルワリード取水堰。洪水により堰対岸の中州が流失した

今秋、試験農場では水稲の収穫も行われた

消え、緑が広がっています。アフガン人は根っからの農民である上、小麦が主食ですから、職員・作業員がみな立ち止まり、うっとりと眺めます。昔日本でも見られた若麦の鮮やかな緑の絨毯は、苦労しただけ美しく輝いて見えます。

かつての「死の谷」は、今や生命の躍動する場所となりました。鳥や昆虫たちの姿が増えました。牧畜や養蜂も、来年から始まります。大きな貯水池では、養魚も計画されています。遊牧民たちのメッカともなり、続々と羊の群が集まってきます。

この光景は、どんな言葉にも優り、「平和」の何たるかについて、実感を与えてくれるようです。緑の絨毯の背景には茶褐色の岩山がそびえています。地球の歴史を刻む荒々しい岩肌は、自然の前には人の営みがいかに小さいかを示しているようです。

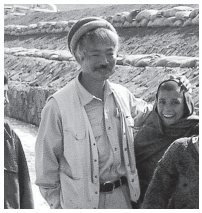
蝸牛角上、何事をか争う
石火光中、この身を寄す
（カタツムリの角のようにちっぽけな世界で、何を人間たちはいがみ争い合うのか。火打石の火花のように短い時間を生きているのだ）

昔の詩人の言葉ですが、ここでは実感です。人に許された僅かな時をおろそかにせず、平和と相互扶助で生かされていることを思い、何だか豊かな気分に浸れるのでした。政治と宗教を超え、平和を願う気持ちは何処も同じです。

猛々しい「対テロ戦争」も、ここでは作為的に思えます。私たちは怯えなくてもいいものに怯え、人に与えられた恵みを忘れがちです。武力で立つ者は、必ず武力で倒されます。もうとっくの昔に、戦争に関心がなくなりました。政治的に正しいかどうかは問題ではありません。ここでは日々の糧と天の恵みに感謝できることが、もっと大切なことのように思えます。

確かに厳しい局面ではありますが、皆さんの支えと祈り、生死を分ける水の恵み、人々の平和への願い、良心的なアフガン人の協力らによって本事業が成り立っていることを思い、励みとしております。このような仕事に携われることに感謝し、併せてご協力を引き続きお願い申し上げます。

良きお正月をお迎え下さい。



中村（なかむら）　哲（てつ）…九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二六年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院ＰＭＳをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長二五・五キロが開通した。年間診療数約七万人（二〇〇九年度）。

◎ワーカー通信

ああ、我が恥多き所行

ペシャワール会事務局・現地連絡員
杉山大二朗

仲良き（?）会計四人組

今年の夏からジャララバード事務所の会計係に配属された。

他にも水路現場のデイリーレポートや週間レポート、そして月間農業レポートも担当しているが、日常業務は主に事務所で会計の仕事をしている。

会計の責任者であるハニフラさんとカービル、村井君、私の四人で担当している。

「ほら、ミスター・ダイ。この伝票はまだ精算してないよ。あれ？　これ、昨日と同じミスだぜ。ちゃんと見ろよ！」

「ありゃ、ほんとだ。いっけねぇ」

ハニフラさんは私が記録した出納帳や領収書をじっくりチェックして、間違いを訂正してくれる。

実に細かい性格をしている彼と、万事が大雑把で適当に生きている私とは相性が良く、喩えるならば曹操と劉備、大久保と西郷という良い関係が築けそうである（あれ、いずれも敵対し合ってるか）。

「あーぁ、まーたミスター・ダイがミスしてる！　ペナルティーとしてビスケット一箱ねー！」とカービル、村井コンビが囃（はや）し立てるので私は三白眼を剝き、「せからしかっ（五月蠅）！」と一喝。

このように終始、冗談（?）を言い合っては、にこやかに仲良く仕事をしている。

因みに会計の部屋では基本的にパシュトゥ語で話しており、いつからか日本語や英語は極力話さないのが暗黙の了解になっている。

古傷も今や勲章？

日本から元会計係だった松永君の電話が入る。

懐かしい仲間からの電話と知り、ハニフラさんとカービルに代わる。

彼らが私を見てニヤニヤ笑うので「何、笑ってんだよ？　以前、俺が会計のデータを間違って消去したことでも話してんのか？」と問いかけると、彼らはゲラゲラ笑った。

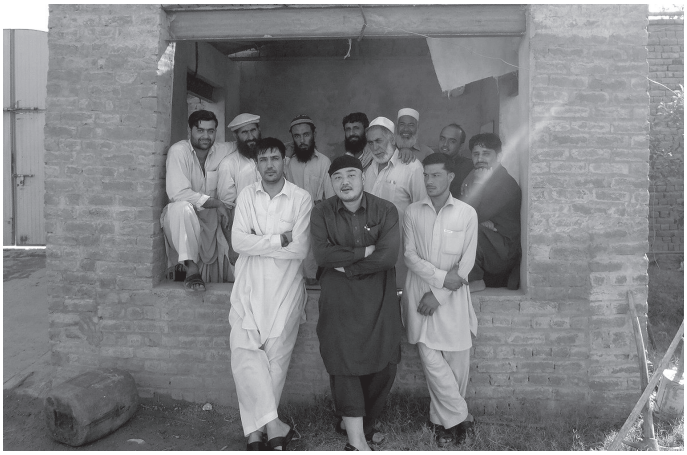
ちぇっ、当たってても、全然嬉しくない。

もう時効だから書くが、以前松永君が日本に休暇帰国した時に私が一時会計の日常業務を任されていたのだが、あろうことか会計データの一部を消去してしまった。

思わずポンペイの石膏像のように硬直した後でパニクった私は、迷わず日本に急遽電話して松永君に事情を説明した。

「……」

「おい松永君！　聞いてんのか!?」



ジャララバード事務所のスタッフと杉山ワーカー（前列中央）

かつて「死の谷」と呼ばれたガンベリ沙漠で実った稲穂

あっか!?」（↑何でエバってるんだ？）

「いや、もういいっす。後の処理は俺がそっちに帰ってからしますから……。大さん、お願いですから、これ以上、会計データに触れないで下さいね」

その後、日本で海鮮ウニ丼、焼き鳥、豚骨ラーメン、カルボナーラ、酒を彼に振舞っては紳士協定を結び、今ではお互いに「なかったこと」として忌まわしき過去に触れないようにしている。

そこで事務局長のジア医師が「何を愉しそうに喋ってるんだぁ？」とニコニコしながら部屋に入って来られた。

ハニフラさんが言わずもがな、データ消去の話をジア医師へ丁寧に説明する。

涙を流しながらジア医師は笑い転げ、その笑い声を聞きつけた他の事務スタッフも「何だ何だ？」と会計部屋に来て、伝言ゲームの連鎖で「ぴゃはは！」と笑う。

「聞こえてますよ……、はぁ、やっぱり何か起きると思ったんすよねぇ……」

「期待を裏切らないのが俺の主義だ！　文句こうなったら仕事にならない。皆で私の失敗を論い（あげつら）、腹を抱えて笑う。

そうなったらお互いの失敗や欠点を罵詈雑言を総動員して「ペナルティーとしてビスケット買ってこーい!!」の大合唱である。しかし髭面男どもが子供のようにビスケットと連呼するのも可笑しな話だ。

「一ルピーも、一アフガニーも無駄にしない」

こんな話を書くといつも吾々が遊んでいると思われるので、ちゃんと真面目な話も書こう。

現在、日本各地で開催している写真展へ私も出向して、来場者の方々に現地の説明をするが、私も会計の仕事を始めて改めて実感したことがある。

「私は僅かな募金をすることしか出来ないけれど、どうか現地の事業に役立たせて下さい」と高齢の女性から募金箱にお金を頂くと、この貴重な募金を必ず現地事業に使わねばという義務を痛感する。

ある日の朝礼で、ジア医師は「日本で募金して下さる方々の為にも、吾々PMSは一ルピーも一アフガニーも無駄にしないよう、厳しくチェックしてゆくので、皆も気持ちを引き締めるように」と訓示された。

頂いた募金を最大限に有効に使い、現地スタッフと共にこの事業を支えることが出来るように精進したい。

会員の皆さんの変わらぬご支援とご協力に感謝致します。

三つ目の取水口工事、四度目の「冬の陣」

ペシャワール会臨時派遣ワーカー
鈴木　学

祭日返上で工事の準備

十月十四日に現地入りしてからはや一ヶ月。雨が降ったのは中村先生が一時帰国して現地へ戻ってきた日、たった一日のみ。現在（十一月二〇日）ジャララバードは朝晩冷え込むようになり、宿舎の蚊の動きもだいぶ鈍くなってきましたが、日中は暖かく過ごしやすい季節です。

昨日まで三日間〝アクタル（犠牲祭）〟と呼ぶ現地のお正月があり、このときばかりは仕事も休みになります。中村先生は今後の工事計画を練りながらも「あと三回寝ると現場に出られる」「明日はとうとう現場に……」と、春を待つ雪国のひとのように指折り数えています。かく言う自分もこれまたじっとしておれない性格、ジャララバード事務所内でマルワリード取水口改修工事のために使う型枠作りの準備に追われて過ごしました。

今回もクナール川の水位が下がる冬季限定緊急工事のため、これまで同様シェイワ取水口があるカンレイ村の、取水口工事に慣れ親しんだ仲間たちとの工事となりました。

それに加え近藤君や鬼木さん達と長く働いた作業員も加わり、経験を積んだＰＭＳの精鋭現地スタッフと、皆一致団結して夏の激流にも耐えうる強固な取水口作りに努めています。

二〇〇三年の水路工事開始時に現場入りし、今回で通算四度目の冬、三つ目の取水口工事となりました。仕事を終え、これ以後は現地のエンジニアに任せた、と思っていつも帰国していますが、七月終わりから八月はじめにかけてパキスタン、アフガニスタンを襲ったモンスーンの影響でクナール川も百年に一度の大洪水。中村先生より、増水した濁流がカマ取水口を乗り越え水路に流れ込み、対岸のベスード村落も深く浸水した写真とともに応援要請が来ると、何はともあれ現地の人たちのお役に立つのなら……と、今回も駆けつけました。また中村先生と一緒にクナール川をじっと睨みつつ日々取水口工事に励んでいます。

五〇年来の〝タクリフ（心配事）〟に挑む

さてさて、カマ取水口はすぐ下流でクナール川とカーブル川が合流し、夏と冬の水位差が最大で四メートル以上にもなります。これまでも堰上げのため冬に巨石を投入しては夏の激流に流され、次の冬には堰に水が乗らないということを延々と繰り返してきており、当地では「カマ取水口完成は不可能」と云われてきたそうです。しかもカマ地区はニングラハル州の中でも最大の耕地面積を持ち、カマ取水口に問題が生じ、取水できない年には小麦価格の高騰を招くことでも有名です。

鈴木ワーカーの現地到着と同時に始まったカマ第２取水門の工事

カマ第２取水門設置作業中の鈴木ワーカー

しかし、日本の伝統技術を生かし、ダラエヌール渓谷ブディアライ村の丸巨石を低く広く敷き詰め、水抜きを設ける中村先生の技術は、ただただ大石を高く積み上げて堰上げを目論む当地の一般的なやり方とは雲泥の差があることを人々は理解しています。

カマ長老会は今年の小麦を犠牲にしても五〇年のタクリフ（心配事）をここで解決すべしと決定、ＰＭＳ（日本人）とその技術に命運を託した――と聞いて、びびっていては仕事になりません。ここは日本人の腕の見せ所、という訳ではないのですが、いつも同様基礎工事から中村先生と気合を入れてやっております。

計八つの水門を新設・増強

カマ取水口の夏（増水時）の水圧は尋常ではないので、堰上げ高も最小限に抑えないと非常に危険です。中村先生の設計により、水門を一・五メートル×四門（これは旧水門に対し一・六倍の広さです）と目いっぱい広く取り、増水時堰板に掛かる水圧を減圧するための第二水門も併設（合計八門）、位置も夏の激流に逆らわないようフロント位置と角度を慎重に決定しました。

堰と取水口工事は対岸工事なくして成功なし、したがって対岸ベスード側の護岸工事も着々と進められています。川幅を出来る限り広く取ることは夏の洪水に対応するために最も有効かつ重要な要素であり、これはすなわち堰に対するダメージを軽減することにもつながります。

工事開始から一ヶ月ですが、構造物の全高四・五メートルのうち現在三メートル近くまで出来ています。

中村先生が堰の工事に使う、巨石を積んだダンプトラックが通る予定の天井打ちを早く済ませようと残業が続く日々ですが、オフィスと現場の連携も素晴らしく、ＰＭＳの長年にわたる活動の成果を頼もしく感じながら取水口早期完成を目指して頑張っています。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

▼郵送方法の変更について▼

＊一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

ショベルで造った〝平和の路〟

ペシャワール会臨時派遣ワーカー
石橋忠明

二万分の一の役得

こんな幸せを、二万人の支援者の中でわれ一人が享受してよいのだろうか？　それが、ガンベリ砂漠の平和丘から「緑の大地」を見渡した時の偽らざる心境であった。パミール発アラビア海行きの爽やかな風がほほをなで、過去へと記憶を送る。五年程前のことだろうか。ここに進藤くんと水路の測量、というより砂漠を「眺め」に来たのは。まだこの砂漠は工事の予定にも入っていないかのような時期だった。

「オイ、ずいぶんと広いぞ」

「掘りましょう。やりましょう。夢のまた夢かもしれないけれど」

「うん。だけど、作物は何か出来るのかな？」

水はけの良さそうな砂地に近い土地だ。

「いや、スイカ、メロンには最適だ。小麦、とうもろこし、他にも……」

多少は農業を知っているのか、ドライバーが横から言う。

「小麦が出来れば上等だ」

「とにかく夢は持ち続けよう」

と、こんな具合だった。

それが今、昔の面影はまったく無く、あらゆる作物、水稲まで出来る「緑の大地」に転じた。以前眺めた時の地形がどうしても思い出せない。「オレもボケたか」。いや、風景がバケたのだ。水によって――。武器ではなく、ショベルで平和が作れることを、この耕地を、大国の指導者に見せたいものだ。

最後のご奉公、とユンボで懸命にモスク予定地の整地をしたのは二年半前。

吾々のマルワリード水路に加え、シェイワ、ベスード、カマというほかの水路の修復、新設を住民に依頼され（会報に詳しい）、水路事業が、六〇万人の命にかかわる作業地に広がった。孤軍奮闘の中村医師も流石に手が廻らなくなり、鈴木学と石橋に声がかかった（鈴木祐治は現地事情により延期）。

今回はカマ第二水路の新設の仕事である。石橋は事前の測量にまわり、手島氏を助手として一足先に終了。鈴木学君は水路水門のプロ。

現在、事務方の村井、杉山両君と現地スタッフ、作業員の熱い、強力なバックアップを得て驀進中（事故や怪我の無いよう頼むね）。

現地長老会の英断に応える

話は少しさかのぼり、十月二日。今冬新設すべきカマ水路に長老三〇人ほどが集まった。ジア医師の音頭で、中村医師と石橋が長老達の前に座る。今年の小麦はあきらめるので、がっちりした水門水路を作ってくれ、ついてはいつから水を止めるか、という協議で

ガンベリ沙漠にある平和丘から眺めた風景。防砂林も生長した

護岸のための蛇籠づくりに励む現地作業員たち（カマ第２取水口近く）

ある。「絵になりそうな」というにはあまりにも真剣な「絵」である。当然である。カマ住民三〇万人の命に関わる大事だ。結局、「水は一週間後に止める」と合意。その瞬間、全員で祈りを捧げ、さっと解散。もう後には引けない。働くか、死か（働いてから死ね、とは云わんだろうね?）。相手はパシュトゥン。臆病、ウソツキと言われる位なら、死を選ぶ人々である。こちらも、武士道、大和魂で応ずるしかあるまい。

現地スタッフの意気も軒昂

とまれ、スタートである。帰りの車中では事の重みで寡黙になる。ジア医師が「おい、イシバシ元気か。しゃべれよ」と、肩をたたき、気を使う。それにしてもこの人は変わったなあ。ペシャワール病院にいた時は、互いに抱擁は交わすものの、どこか医者特有の取っ付きにくさがあったのに、今は、「元気すぎる」ドクターである。しかし、その献身ぶりは凄まじい。事務所の統括をはじめ、治安管理、重機の手配等、日夜、自ら動く。

凄まじい、といえば、現地の人々の働きぶりには正にそんな熱気がある。ほとんどの仕事は彼らで出来る。というより、彼らのほうが優れている仕事も多い。もう日本人は、「黒衣（くろご）」に徹したほうがいい（黒でなくて、灰色でもいいね、とは中村先生。先生はきっと長生きですね）。もっとも、それが本来の「支援」のあり方であろう。「アフガン人のアフガン人によるアフガン人のための」水路なのだから。少し寂しい気もするけれど。

しかし、吾々は堂々と言える。善意のお金のみで、皆の無償の献身のみで、アフガン東部六〇万人の命を支える水路、水の路（みち）は、間違いなく希望そのものであり、平和への路である、と。

サファル・バハエル！（良い旅を）――――――6

アーカブの帰郷

甲斐大策

初冬の残陽がパグマン山地を赤紫色に染め上げる。山裾の末端が平原に届くあたりを夕靄が覆い、北上する国道はその下に沈んでいった。

アーカブは、三十年を石工として生きたカーブルを棄てた。貧しくとも誇りに満ちた母のようだったカーブルは死んだ。物欲し気な卑しい眼の人間が悍（おぞ）ましくのさばる街に未練はなかった。

国道を二五キロ歩いた後アーカブは、故郷タパ・ダラ村へ続く、家畜の踏み跡でもある山路に入った。傾いた大地の行く手に、一メートル余の砂礫の高まりと窪地が見え、アーカブの口からクラーンの唱句がもれてきた。

アーカブの祖先は、何世紀も前にイランから入植した一族である。一帯の人々は、一族代々の家長をモカンニ・ヤズディ（ヤズドの地下水路掘鑿師（カレーズ））と呼（ジャ）んできた。いつの頃か一族が大カレーズに開いた水場を、その水源がパグマン山中に秘められた天馬の餌場の湧水、と人々は信じ、ジュウイ・ドルドリ（天馬の水場）と名づけて、聖地のように慈しんでいた。

八一年、ソ連軍戦車の無差別攻撃から遁れ、平原を目指してカレーズに這入ったイスタリフ村の女子供数十名に、追撃する兵士たちは、ガソリンを流しこみ火を放ったのだった。点々と連らなる竪坑から黒煙が昇るのを、当時十三歳だったアーカブも望見、一族の男たちに従いひときわ激しく黒煙が昇るジュウイ・ドルドリへ駆けつけた。

何故この者たちがジャヒーム（地獄（ジャヘナム）の一種、火の窯の意）に、と男たちは、遺体を横たえた荒地に身を投げ出し、身悶えして泣き叫んだ。

窪地の暗がりの先には、横穴の名残りが濃い闇を見せている。

九二年、米軍の空爆で泥塊と化したタパ・ダラ村の再建と共に、一族の血にかけてカレーズとジュウイを復活させる、全てはインシャ・アッラー、とアーカブは自らに語りかけ続けた。

◎ペシャワール会現地報告写真展に寄せられた感想から

先ごろ、三〇歳になった。ふと二〇代を振り返ってみると、その半分近くをアフガニスタンで過ごしていたことに気付く。

中村医師やその周りの人たちがやってきたことを、そのそばで見てきて、それを支援者の方々に報告できたらという想いから『ペシャワール会現地報告写真展』を企画し、これまで全国二〇ヶ所ほどで開催してきた。

来場者のほとんどを年配の方が占めるなか、自分と同年代やさらに若い年代の方々も少いながらも熱心に見てくださった。今号ではそういった若い世代、一〇代、二〇代の方々の感想を紹介したい。将来への不安や希望、迷い、疑問、さまざまなものを抱えている若い人たちが、この写真展でそれぞれになにかを感じとってもらえたのだと思う。

と、写真展の感想を整理していたら、しっかりとしたことを書かれているのは女性が多い。写真展にも展示してある中村医師の言葉が思い出される。

「日本がダメになったのは女が権利を獲得したからではなく、男が駄目になってきたからだ。（中略）これは国の衰亡に関わる。男よ出てこい。女よ、軟弱な男をひっぱたけ。」

――中村哲『辺境で診る辺境から見る』

（現地連絡班　写真展担当　松永貴明）

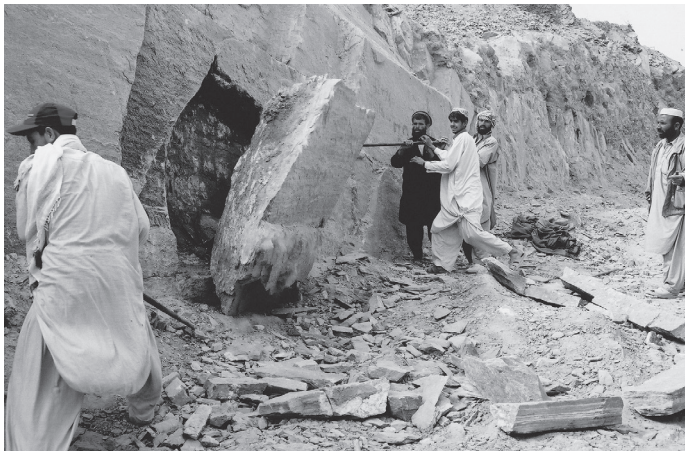
◎私は、小さい頃から医師になりたいと思ってきました。そして難民キャンプなどで、働けたらと思っていました。そして、先日、中村先生の講演をお聞きし、正直怖くなりました。病院への襲撃は予想以上のものでした。私は、甘かったです。日本で悠々と育ってきて、何もできないし、何も分からないし、ほんとうに子供なんだなあと感じました。人に健康を提供することができる医師という仕事。それは同時に笑顔を、幸せを、安心を提供することができる仕事です。私は、どんなにかこの自分までも幸せになれる仕事にあこがれているか知れません。しかし、この仕事を、そして自分の夢である難民キャンプなどの医療が行き届いていない所での活動を全うするには、並大抵の努力では叶いません。それを、今更ながら知り、立ち止まってしまいそうな私は、医師でありながら、シャベルをもつ、中村先生の活動に勇気をもらいに、本日、ここへ来て、そして今、緑の芽生える大地をみてあたたかな気持ちになっています。

（10代女性）

◎アフガニスタンのイメージは「戦争」「紛争」というものでしかなかったけれど、今回お話しをきいて現地の人々が積極的にボランティアの方々に助けられながらも自分たちの力で復興に努めている姿を写真でみてすごく感動しました。一人ひとりがみんなのために力をあわせれば砂漠の地に水が流れて、自然がいっぱいになるように、私たち一人ひとりができることをすれば、平和につながるのではないかと感じました。また、現地の人々に合った方法や材料をつかって作業しているというのも、今まではただ最新の技術などを取り入れればと思っていたところもあったので、なるほどと思いました。本でも見ましたが、「援助してあげる」という見方ではなく、向こうの国の人々の立場で考えることが大切なんだと改めて教えられたと思います。私も誰かのためにできることをみつけて実行していきたいです。

（10代女性）

◎知り合いの方の日記でこの報告写真展のことを知り、来ました。恥ずかしながら詳しいことを知らず、軽い気持ちで来ました。中村さんの一つ一つの言葉に考えさせられました。「平和のほうが戦争よりも忍耐と努力を



岩盤周りでの採石作業（写真展に展示）

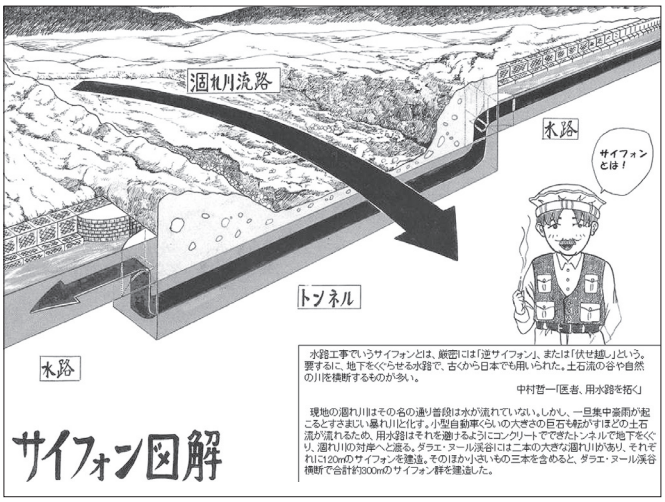
要する……」ような言葉にも。何もなかった乾いた土地に、緑が育ち、水が流れ、人々が生きている姿に簡単には言えない感動がありました。色々な場所で日本の技術がいかされ、現地の方々の努力と強さと素直な気持ちがある。すごいなと何度も思いました。涙がでました。言葉にすることは簡単で、行動することは難しい。だけど見捨てられない。もっと時間をかけて今日のことを考えたいと思います。ありがとうございます、という言葉では片付けられないです。私も何かのかたちで協力したいと思いました。

（20代女性）

◎毎日楽しく送っています。けれども大学で自分がやろうとしている研究の意義がなかなか納得できずにいます（日本の森林と土砂災害の研究ですが、それ以上〝完璧なコントロール〟を目指すのは、限度をこえた傲慢な気がして）。そんな中で、疑う余地もない活動の跡を見せていただけたことに感謝の気持ちです。用水路の完成、本当におめでとうございます。そこに水を差すようですが、雪が山から消えていっていることに一抹の不安を覚えます。私たちの浪費の結果が雪の消失につながり、川の水がなくなるなどということが無いといいのですが。そのための行動は、いくらしても本当は足りないのだと思います。こういう意味のある仕事がしたい、という目標と、今すべきことはもっとあるのではという焦りの気持ちをいただきました。

（20代女性）

◎私は学校の掲示板に張ってあるチラシを見て、この写真展を知りました。以前から中村さんの活動にとても興味があり、今回スタッフの方に色々お話も聞くことができてとても嬉しかったです。展示してある中村さんの言葉の、「現地の人々は外国人の情熱のはけ口でもなければ、善意の対象でもなく、日本人と同じように文化と生活意識を持った生身の人間である。」というような表現がとても心に残っています。何も生えていなかった灰色の土地が数年後、全く違う場所みたいに緑で覆われていたのにも、とても驚かされました。私は将来、中村さんのように現地に行って、現地の人と一緒に働きたいと思っています。一緒に働いて、その文化を体験して、ひとつのことをやり遂げる喜びを共有することにすごく魅力を感じるからです。当然、写真には写っていない大変なこともたくさんある



杉山ワーカー作の図解パネル（写真展に展示）

はずですが、今回写真展を見て、思いが一層増しました。これから私は受験なんですが、目標を持って頑張ろうと思います。

（10代女性）

◎用水路の開通の軌跡をじっくり見ることができて、改めて息の長い活動をされているなあと実感しました。日本にいると、日本のスピードでせかせかと暮らしてしまい、アフガンの現状をニュースで見ると米軍のアフガン派兵の増兵や誤爆や現実の重さを感じずにはいられないのですが、人々の暮らしにまで思いを馳せることまではできていないのが正直なところです。用水路が現地の人々の暮らしに再びうるおいをもたらしていることを語りかける写真に、本当の支援とは何かを教えられる気がします。

（20代女性）

◎ペシャワール会の活動については、なんとなく知っていたつもりでいたが、このような大規模な活動を行ったことや、これからも行っていくということを全く知らなかった。医療活動から、水の確保のための井戸掘り、そしてそれらが用水路の建設につながっていったのは、中村哲さんらが、表面的にだけアフガニスタンの人々を支えようとしたのではなく根本からアフガニスタンに住む現地の人々の生活を支えようとした志が産んだ結果だと感じた。その中でも、現地の習慣や伝統を尊重するということを常に念頭におくことを重視した中村さんを私は尊敬する。なぜなら、そういう根本的な解決というものはとても難航する上に、その中で日本人の目線ではなく、現地の人々の視点で考え続けることは想像を絶するほどの努力を要するものであるからだ。この写真展を見て、改めて命の大切さ、尊さ、そして命の重さに差はないということを感じた。とても心に残る感動的な写真展だった。

（10代男性）

◎私たちは平和であることを当然とおもい、他の国で戦争などがあったとき「どうしてだろう」「早く終わればいいな」など〝祈る〟ことしかできていない。でも、本当に平和を望むなら〝祈る〟のではなく、〝行動する〟ことが必要なのでは？と考えた。中村さんの講演会や伊藤さんの追悼写真展へ行ったときも私ができることを考えさせられました。まずは各国のことを知り、考えることが私にできる一歩目かなと思います。

（10代女性）

＊

写真展はまだまだ続きます。十五ページに写真展の開催情報がありますので、近くでの開催の折はぜひ足をお運びください。

2011年カレンダー

「魂の水、魂の大地」

画・甲斐大策

お早めにご注文ください！

A2判変型（画・7点）
定価：1500円（税、送料込み）

恒例のカレンダーの注文・発送を開始しています。今年は例年以上に好評です。ご希望の方はお早めにご注文ください。ご友人等へのプレゼントも承ります（同封のハガキでご注文ください）。

◉現地報告写真展レポート

事務局や現地が身近なものに

沖牟田龍雄

福岡県大牟田市でペシャワール会現地報告写真展『人・水・命　～27年のあゆみ～』を、「みきの国」を会場に開催しました。

前回の写真展は大牟田の者だけで開催しましたが、今回は準備の時から松永君と元気いっぱいの廣瀬さん、その姉さん、マリノちゃん、それに本やペシャワール会報で活躍を良く知っている藤田さん（総会で一回見たくらいで、近くで話すのは初めて）達が写真の飾り付けから来てもらいました。

期間中、福岡が近いこともあって毎日三、四人たえず来ていました。

福田のおばちゃんが毎日出勤して来て、家族的雰囲気の中で写真展が開かれました。廣瀬さん、斉田さん達から事務局の話、松永君や藤田さん、鬼木さん達から現地の話などを聞き、事務局や現地の人たちが近くに感じられてきました。

聞いてみると交通費も食事も自前と聞いて、こりゃ毎日交通費もあるし、食事代もじゃ大変だということで、昼は毎日自然農的に作った玄米を炊いて、だご汁やおかずを百姓仲間の鳥越さんや妹の友人のたえちゃんやら色々たのんで、日替わりで作ってもらったりしていました。

最終日が福元さんの講演と映画上映（会のＤＶＤ）だったが雨の少ないアフガンで恵みの雨を降らせるという松永君が降らせたのか、朝から大雨となり、島原や福岡など遠くの人たちから雨がひどいけんこれんヨと電話があり、こりゃ大変と言う事であっちこっちに電話をしたり、ＦＡＸしたりし、会場と駐車場を空けて、松永君、廣瀬一族、藤田さん、福田さん等にまかせて、ビラくばりに行き、図書館に行って見たら、ほとんどチラシが減っていないので、これはいかん、他の所より図書館に来る人の方が、来る確率が高かろうという事で、入口の近くで配って見たら、他の所より反応が良し、〝こりゃ良か〟。注意された頃はほとんど配り終わっていました。

日頃の行いが良いせいか（？）昼過ぎから雨も止み、写真展も多くの人が集まり、映画上映するころは人もだいぶ集まり、イスも追加で会場に上げても足りず、立ち見の人も居て盛況でした。福元さんの話もアフガンの現在の背景や歴史から話し、分かりやすかったが、熱がこもって来て時間が足りんという感じで今度は二時間くらいの講演にせんといかん様です。

前準備やチラシ配布や当番などで、三池高校地歴部ＯＢの大原君、中原君、平和の琉歌の長谷川さん池田さん、日中友好協会の小野さん田中さん真弓君、田んぼの会の樋口さん、自然を守る会の大崎君、ほか色んな人たちの助力で現地報告写真展、福元さんの講演が無事成功裏に終りました。

今度の事で現地の事がだいぶ分かり、ペシャワール会事務局の人達と気心が知れて、気楽に行けるのかなーと思っています。

福岡県大牟田市での写真展の様子

ペシャワール会現地報告写真展

～開催地のお知らせと開催地募集～

山梨県甲府市　12/4 ～ 12/12
会場：山梨県立男女共同参画推進センター ぴゅあ総合
共催・運営：山梨「ペシャワール会」を支援する会
TEL：080-6733-0074
E-mail：peshawarsupy@yahoo.co.jp

長崎県長崎市　12/7 ～ 12/24
会場：ナガサキピースミュージアム
共催・運営：ナガサキピースミュージアム
TEL：095-818-4247　FAX：095-827-7878

※ 沖縄県那覇市　12/21 ～ 12/26
会場：パレットくもじ 那覇市民ギャラリー
共催・運営：沖縄でペシャワール会現地写真展を成功させる会
FAX：098-968-2679
E-mail：murakami@m.email.ne.jp

※ 福島県猪苗代町　2011/1/13 ～ 1/22
会場：猪苗代町体験交流館「学びいな」
共催・運営：ペシャワール会写真展猪苗代町実行委員会
TEL・FAX：0242-62-3759

福岡県田川市　2011/1/21 ～ 1/30
会場：新橋ギャラリー
共催・運営：新橋ギャラリー
TEL・FAX：0947-42-8162

※ 広島県福山市　2011/2/11 ～ 2/13
会場：まなびの館 ローズコム 4 階
共催・運営：中村医師のお話しを聴く会
FAX：084-972-5590

※ 大阪府島本町　2011/2/12 ～ 2/21
会場：島本町ふれあいセンター（4 F ギャラリースペース）
共催・運営：奥山さん（個人）
FAX：075-961-6603

※ 東京都千代田区　2011/3/11 ～ 3/17
会場：明治大学駿河台校舎アカデミーコモン 1 階展示コーナー
主催・運営：明治大学軍縮研究所・ペシャワール会現地報告写真展東京実行委員会
TEL・FAX：03-3495-4048（安藤さん）
E-mail：g-hakogi@nifty.com（箱木さん。件名には「ペシャワール会写真展」と入れてください）
＊お知らせ　3 月 11 日 18:30 ～ 21:00、309B 教室でビデオ 上映会とワーカーの現地報告を行います。

※ 京都府京田辺市　2011/3/29 ～ 4/3
会場：京田辺市立中央図書館ギャラリー「かんなび」
共催・運営：2010 年問題を考える綴喜の会
FAX：0774-62-6045
E-mail：m-kobayashi9@kem.biglobe.ne.jp

※ 兵庫県神戸市 2011/4/28 ～ 5/2
会場：兵庫県民アートギャラリー
共催・運営：ペシャワール会写真展 in 神戸実行委員会（仮称）
FAX：078-862-6081
E-mail：sts_kgw@yahoo.co.jp

※ 鳥取県鳥取市　2011/6/6 ～ 6/12
会場：とりぎん文化会館 1 階フリースペース
共催・運営：浜本さん（個人）
TEL・FAX：0857-30-0048

※ 印のついた各会場では会期中または準備段階からのお手伝いや協力をしてくださる方を募集しています。ご希望の方は各開催地にお問い合わせください。
以下の地域では写真展開催を検討しており、協力してくださる近隣の方を募っています。協力していただける方は各問合せ先にご連絡ください。
①高知県高知市近辺（筒井さん）　TEL：090-9557-6152　E-mail：o4k8i2t2a8s@docomo.ne.jp
②福島県いわき市（鞍田さん）　TEL：0246-56-2596　E-mail：ru2a-krt@asahi-net.or.jp
また、ペシャワール会では全国各地で現地報告写真展を共催してくださる団体 もしくは個人を募集しています。ご質問などございましたら、以下の FAX または E-mail にてお問い合わせください。
FAX：092 - 731 - 2373　　E-mail：pmspk92af93@yahoo.co.jp
決定した開催地は順次ペシャワール会ホームページに掲載いたしますので、ご確認ください。

●事務局便り

＊夏の大洪水の復旧工事に、中村医師を始め現地はまさに命がけで取り組んでいる。クナール川の水位が低い二月までが勝負である。予期せぬ災害の為、十一月に予定されていた中村医師の講演会も予定変更を余儀なくされた。主催者の方々には、さまざまなご苦労をおかけしたことをお詫びするとともに、事情をご理解いただいたことに深く感謝いたします。

＊この洪水（集中豪雨）によって、建設中のマドラサの寄宿舎建設にも遅れが出た。しかし建物はほぼ出来上がり内装の段階にある。来春には、マドラサ側に引き渡される予定である。

＊雑誌「ニューズウイーク」の最近の調査によると、アフガニスタンでの戦争に関心を持つのは、米国市民の三パーセントだとのこと。いまや大半の市民の関心は「景気と雇用」に移ったという。「チェンジ！」というキャッチフレーズで登場し「アフガニスタンこそが主戦場である」と宣言したオバマ政権は来夏より撤兵を開始する。NATO軍も二〇一四年までには撤収するという。かつて大英帝国が、三度の戦争でアフガニスタンを屈服させ得ず、ソビエトも十年の侵攻で疲れ果てて撤退した。イラクやアフガニスタンの戦争で、アメリカと国際社会の何が、「チェンジ」したのか、じっくりと見てゆく必要がある。

＊国際的な気流変動の中で、日本国がダッチロールのなかにあります。皆さん方の変わらぬご支援を受けて、来年の激流も乗り越えてゆきたいと思います。

ペ村から――――――♪

会の事務局にお手伝いに行くようになって1年と少し。週2回が目標ですがまだ出席率は低く礼状班の仕事もまだ修行中です。かねて仕事からリタイアしたら何かボランティア活動をやりたいと思っていましたが、何をするか決めかねていました。そんな時、会報を目にする機会があり、これは本物だと直感しました。すべてのお金が会本来の活動のために使われ、中村先生が単なる頭脳活動だけの司令塔ではなく、陽に灼かれ砂塵にまみれ、文字通り身を削り人生の殆どすべてをかけて、辺境の人々のいのちを支えることだけを目標にしていらっしゃることに感銘を受けました。たまたま地理的な幸運に恵まれ、そのような貴重な活動の一部に微力ながら関わらせていただける幸運をしみじみ感謝しています。ただ、ご帰国の折の事務局での報告会でお見かけする先生の、時にやつれていらっしゃるようにも見えるお姿に接するとき、余りにも大きな負担が先生にのみ集中している現状に申し訳なく思います。（K・T）

医者、用水路を拓く
アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲　用水路建設事業の7年をつづった感動の記録　【3刷】1890円

辺境で診る辺境から見る
【3刷】1890円

医者 井戸を掘る　【10刷】1890円

医は国境を越えて　【6刷】2100円

ダラエ・ヌールへの道
【重版・5刷】2100円

ペシャワールにて　【8刷】1890円

アフガン農業支援奮闘記　高橋修・編著
農業計画6年余の失敗と成功を記した貴重な記録【新刊】2500円

アフガニスタンの大地とともに【2刷】
伊藤和也 遺稿・追悼文集
アフガニスタンの復興を、その深きこころで願い続けた伊藤ワーカーの遺した足跡
A5判並製260頁 カラー90頁　1575円

聖愚者の物語　甲斐大策

1890円

石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24　電話092(714)4838
価格はすべて税込価格（税5%）です

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一　福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号 TEL〇九二―七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603
電話092（731）2372　FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559
発行日　2010年12月8日　No.106　会長　後藤哲也　現地代表　中村哲　名誉会長　高松勇雄